

# 地域社会に溶け込む日本東京神殿

—東京神殿別館が令和4年度 港区景観街づくり賞奨励賞を受賞—

**東**京神殿別館が、令和4年度の（東京都）港区景観街づくり賞奨励賞を受賞し、11月7日に授賞式が行われた。東京神殿の改装と神殿別館新築の設計を行った株式会社久米設計の片山 英氏、外構設計協力を行った株式会社ディー・エムの池内 優氏とともに、教会コミュニケーション宣教師のブライアン・J・パークドル長老が港区役所を訪れ、授賞式に出席した。

港区景観街づくり賞とは、地域の景観の向上に貢献した建物と設計者を行政が評価し顕彰することで、優れた街づくりにつながる港区の取り組み。平成23年（2011年）度を皮切りに毎年続けられている。今回は景観街づくり賞3件、景観街づくり賞奨励賞3件が選ばれた。受賞建築は港区役所内にパネル展示され、また港区のウェブサイトでも広く紹介されている。<sup>※1</sup>

東京神殿別館については、ウェブサイトにも2人の審査員の講評が掲載されている。

「……公使公邸などもあるような落ち着いた街区を、より気持ちよい空間にしてくれた。教会ながら、前庭を公園との調和を考慮した和風デザインにして、日本の常緑樹や石材の活用などに取り組み、これからの樹木の成長が期待される。別館の外壁の仕上げ・色彩も周辺との調和をテーマに選定したようで、穏やかな色調と質感が、ゆっくり散歩できるみちの形成にも役立っている。」「……全体をぐるりと囲んだ道路とは塀やフェンスを設けずに外構



日本東京神殿と別館



授賞式にて。前列右端が片山氏、後列右端がパークドル長老、その左隣が池内氏

植栽で区切り、一見シンプルながらも細やかに仕上げられた外壁が、今後長きにわたってこの建物がこの地に馴染んでいくことを予感させる。アプローチの引きやそこに設けられた石灯籠、石積み小池と和風の植栽が、正面道路の向こうの公園の豊かな緑と呼応して、信者だけでなくまち全体に愛されていると感じる。」

授賞式当日の講評では、別館正面から見て右側の北面の造りについても「ひな壇形式にしている、周りから見ても高さや圧迫感をあまり感じない……有栖川公園周辺の閑静な住宅地に相当配慮している」と評価された。外構設計の池内氏は、「地域になじむように、植栽も元々この地域に生えている樹種を中心に選んだ」

という。片山氏は、「すでに整っている街並み景観を損なわず、良化するのが本計画のデザインコンセプトの一つであり、それが公に認められた」と喜びを表す。また「非常に丁寧な仕事で風格のある印象」と評価された別館の外壁の仕上げについて、「現場段階で相当試行錯誤した。アーキテクチュラルコンクリートの表面を工場でも初めて試みるレベルでブラスト加工<sup>※2</sup>し、一部の版は現場で職人さんに削ってもらった。細やかな仕事を評価していただけて、うれしく思います」と語った。

東京神殿と別館はその外観とともに、霊的な意味でも、イエスキリストの深い影響力を地域社会に及ぼしている。十二使徒のゲリー・E・スティープンソン長老は語る。「神殿……は教会員のよりどころとなるだけでなく、(訪問者センターなど)教会員でない人も訪れることができる場です。……この神殿は今や教会員だけでなく、地域の人々にとっても帰属意識を感じられる場となるでしょう。」大管長会のヘンリー・B・アイリング管長もこう言い添える。「わたしたちは皆、宗教を特に持たない人々をオープンハウスに招くという経験をしました。招かれた人々は神殿の中で座り、歩き回り、何かを感じました。今、日本には『あの神殿の中で何かを感じた』と思っている人が多いです。それが人々の意識を変えるでしょう。尊敬できる市民として教会員を受け入れてくれるようになるでしょう。」<sup>※3</sup>◆

※1—<https://www.city.minato.tokyo.jp/matizukurikeikakutan/keikanmachidukurisyou.html>  
 ※2—物に、研磨剤を高速で衝突させて表面を削り、風合いを与える加工

※3—【再奉献が地域にもたらすもの】アイリング管長 & スティープンソン長老 東京神殿インタビューvol.5



# 「あなたがたは神に仕えたいと望むならば、その業に召されている」<sup>※1</sup>——より多くの若者に伝道活動の扉を開く奉仕伝道部

**現**在、日本で若い奉仕宣教師のサポート体制を整え、より多くの若者の伝道の機会へつなげるための動きが始まっている。その一つが2021年に開設された「奉仕伝道部」である。これまで日本において奉仕宣教師として活動してきたのは主にシニア層の宣教師たちだった。様々な事情で伝道活動を諦めざるを得なかった若人に伝道の祝福を——成長と発展が期待される奉仕宣教師と奉仕伝道部についてご紹介する。

## 奉仕を通してキリストの元に導く

「奉仕宣教師」は、奉仕を通して伝道活動を行う宣教師である。これまで一般的に知られてきた専任宣教師が「見つけ、教える」ことを主な目的とする「ティーチング伝道」を行うのに対し、奉仕宣教師は地域社会や教会組織、慈善団体における奉仕を目的とした「奉仕伝道」を行う。

「身体的、精神的、あるいは情緒的な理由によりティーチング伝道が可能ではないふさわしい若い男性（18-25歳）と若い女性（19-25歳）<sup>※2</sup>は奉仕宣教師としての召しを受けることができる。全ての宣教師志願者は、まずティーチング伝道について検討された後、上記の条件に当てはまる場合において奉仕宣教師として召される。彼らは奉仕伝道部に所属し、基本的に自宅を拠点として活動する。

奉仕宣教師は、宣教師本人の体調や特性を吟味し居住している地域のニーズに応じた活動を行う。ステーキから割り当てられる奉仕や、ホームワードで割り当てを受けている責任に関わる奉仕も宣教師活動に含まれる。個人の才能やスキル、賜物に合わせた形で奉仕活動を行うことを通して、人々にミニスタリングを行い、キリストの愛を示すことが奉仕宣教師に求めら

れる働きである。

## 奉仕宣教師をサポートする伝道部

2021年秋より、日本では奉仕宣教師のサポートを行う組織として「奉仕伝道部」が発足した。奉仕宣教師たちは奉仕伝道部に所属し、「奉仕伝道部リーダー」と適宜ミーティングを持ち、心身の健康に関するサポートや奉仕活動に関するアドバイスを受けながら働く。2022年8月より新たに奉仕伝道部リーダーに召されたのは、<sup>せきぐちあさむ</sup> <sup>たかこ</sup> 関口 治 長老・貴子姉妹である。貴子姉妹はこれから奉仕伝道部が果たす役割について大きな希望を抱いている。

「これまで、伝道に出たくても体調が思



サラ・歩美・田中姉妹。  
8月に開催されたfsyで  
通訳ボランティア  
として奉仕した

わしくなかったり、障がいがあったり、情緒的な面で不安があったり、様々な理由で諦めていたたくさんの方々々が奉仕宣教師という選択肢を得て、主に仕える機会が広がったというのはすばらしいニュースだと思います。教義と聖約4章3節において主は『あなたがたは神に仕えたいと望むならば、その業に召されている』と教えられていますが、わたしは奉仕宣教師、奉仕伝道部という制度がこの聖句が実現

していくひとつの形であるように感じています。」

奉仕伝道部はティーチング宣教師の転勤先としてもその門戸を開いている。健康状態の悪化や精神的な問題など様々な事情でティーチング宣教師としての働きを続けることができなくなった場合、奉仕伝道部に転勤し、奉仕宣教師としてその任期を全うすることができるのである。

## 奉仕宣教師レポート ——サラ・歩美・田中姉妹

現在、奉仕伝道部に所属するサラ・歩美・田中姉妹は、富山県の自宅を拠点に宣教師活動を行っている。起床時間と就寝時間はティーチング宣教師と同じだが、日中のスケジュールについては体調や状況に合わせて休憩も入れながら柔軟に計画する。「わたしが奉仕するうえでは心身を健やかに保つことがとても大切なので、ティーチング宣教師が30分取っている毎日の運動時間については、1時間から1時間半、長めに取るようにしています」と田中姉妹。運動の後は15分程度かけて予定を確認し、一日のスケジュールを立てる。活動内容は日によって様々だ。地域での奉仕活動に参加することもあれば、ホームワードの召しである若い女性の第一顧問としてレッスンの準備をしたり、活動に参加したりすることもある。日中の活動については適宜休憩を入れながら、体調と相談して柔軟に行っている。

日本人とブラジル人のハーフである田中姉妹はポルトガル語が堪能で、その特技は姉妹の奉仕活動にも大いに役立っている。「わたしがメインにしている奉仕活動は日本語を教える、ということです。東京北伝道部や名古屋伝道部には今ブラジル人の宣教師が増えてきているので、彼ら



東京神殿オープンハウスにて  
通訳ボランティアを行った田中姉妹  
(写真前列右端)



BRAVES Culture Center内のKodomotachi Hirobaにて  
日本語を教えるボランティアを行う田中姉妹



奉仕伝道部でミッションリーダーを務めたウェルチご夫妻、  
奉仕宣教師として働いたカネコア長老(左端)と

## 言葉を使わなくても、隣人にキリストの愛を示すことで、 福音を宣べ伝えることができます。\*3

—ゲリー・E・スティープソン長老

にオンラインで日本語のレッスンをしたり、通訳が必要な求道者のレッスンに参加したりすることもあります。」

田中姉妹が幼い頃からお世話になってきたブラジル人の知人が開いているカルチャーセンターで、外国人の子どもたちに日本語を教える奉仕も行っている。言語の問題で教員との意思疎通がうまく図れない子どもたちを助けるために学校に赴くこともある。「わたし自身がブラジルから来日した当時困ったことを今も覚えているので、そのとき欲しかったサポートと同じような立場の子どもたちに与えることができるのがうれしいですし、自分の持っているタレントを生かして誰かを助けることができるということに大きな喜びを感じています。」

### 主の『御手』となって動く

奉仕宣教師について、田中姉妹は着任した際にミッションリーダーから贈られた言葉がある。「わたしたちはティーチング宣教師のように教えることはないけれども、イエス・キリストにたとえるなら、イエス様の『口』がティーチング宣教師で、イエス様の『手』が奉仕宣教師なんですよ。」奉仕宣教師の一番の優先事項は「行動」においてイエス・キリストのように仕え、証すること——着任したばかりでまだ何をしたらいいかもよく分からなかった田中姉妹の心に、奉仕宣教師の指針が心に刻まれた瞬間だった。

それでも、奉仕宣教師として働き始めた当初、田中姉妹の心には若干の戸惑いがあった。「わたしがそれまで知っていたのは『ティーチング伝道』についての知識だったので、『奉仕伝道』との活動の違いに戸惑いました。自分は主の役に立てているのかな、と悩むこともありました。」だが、田中姉妹の心には主が与えて下さっ

た伝道の任期を全うしたいという気持ちがあった。当時、奉仕伝道部リーダーを務めていたウェルチ長老夫妻とミーティングを重ねて、少しずつ田中姉妹の奉仕伝道の形を作っていった。

奉仕宣教師になって少したった2022年の春先、外国人の子どもたちに日本語を教える活動について、富山の国際センターからの取材を受ける機会があった。記者の女性は無償で奉仕する田中姉妹の活動について聴き、非常に感銘を受けた様子だったという。「田中さんがやっていることは誰かに見せたくてやっているのではなく、自分が心の底からやりたい!と思ってされていることが行動から伝わってきます」と女性は言い、さらにこう付け加える。「田中さんの笑顔や明るさから、たくさん愛を感じることができます。」その言葉は自身の活動について思い悩んでいた田中姉妹の心にまっすぐに届いた。

「教会員の方に同じようなことを言っていたことは以前もあって、それはうれしかったんですけど、キリストの福音を知らない一般の方から言われたことで、わたしはイエス様がされていたことを少しでもできているんじゃないかなって思えました。」わたしは今、主の『手』となって人々に仕えている——その確信は大きな喜びと自信になって、田中姉妹の奉仕宣教師としての活動を支えている。

「イエス様が行動を通して誰かを助けるとき、誰かに手を差し伸べるときの気持ちってこういうものなんだろうなと想像しながら、奉仕活動に力を入れることができるようになりました。多くの人々に無私の奉仕を通してキリストの愛を伝える。こんなにすばらしい伝道活動に携わる機会に心から感謝しています。」◆

\*3—ゲリー・E・スティープソン「愛し、分かち合い、拓く」  
2022年4月総大会説教

Love Share Invite — 愛し、分かち合い、招く



# 35年越しのLove, Share, Invite

— 父親と恩師に招かれたクリスチャンへの道 — 金沢ステーキ金沢ワード 鈴木雅子姉妹

大木 雪慶

**鈴** 木雅子さんは1968年に奈良県で生まれ、幼少期に大阪、滋賀へと引っ越した。茶の間にある父の書棚には聖書物語や聖書が並んでおり、物心ついたときから聖書物語のきれいな絵に心引かれ、取り出せばページをめくった。人の創造やアダムとエバの墮落、出エジプトや金の子牛の話などが、柔らかい心に深い印象を残した。

公務員だった父の転勤の影響で、雅子さんは短期間だけカトリック系の幼稚園に通ったことがある。父に連れられて、日曜日に何度か教会に行ったこともあり、小学1年生のときには、「寝るときには枕元に置いて寝なさい」とマリア像とロザリオを買ってくれた。誕生日には本を選んで買い与え、大きな病気をしていたにもかかわらず、休みごとに史跡巡りに連れて行ってくれたのも父だった。

## 父と契約で結ばれていたことを思い出しました

まだ小学6年で、冬休み最後の日のことだった。「すぐ病院に来なさい。」ずっと父に付き添っていた母から電話があった。状況がよくわからないまま、4歳下の

弟と一緒に急いで病院に向かった。玄関に入ると、ロビーで若い看護師が自分たちを待っていた。「お父さんね、だめだったの。」彼女はそう言うのと、幼い子どもたちを不憫に思ったのか、声を上げてわーっと泣いた。

その瞬間だった。「生まれる前のことを、ふわっと、全部思い出したんですね。それは、頭の中にちゃんと情報があったのに、すっかり忘れていて、『あ、そうだった!』という思い出し方でした。父が早く亡くなる——わたしはそれを分かって父の子どもとして生まれてきたし、父とは契約で結ばれていて、ずっとつながっていたことも知っていた。周りの人も約束を交わっていて、看護師もそのことを知っていたはずなのに、そんなに泣いてどうしたの?」心の中で問いかけた。病室に入ると、母も他の人も皆泣いている。父の身体にそっと触れるとまだ温かった。「母も、父が早く亡くなることを知って結婚したはずなのに、どうして忘れちゃったの?」と思いました。」別れは寂しかったが、それは約束されていたことなので、悲しいとか父が哀れだとは思わなかった。入退院を繰り返し、病に苦しみながらも、自分を愛し



高校時代の雅子さん

抜いてくれた父。「父の死によって、わたしが人生で学ぶべきこと、やるべきことが発動することも知っていました。」心を乱すことなく父を見送った。

父は、四十九日までに数回夢枕に出てきた。顔と顔を合わせて会話できたから、それは夢ではなかったという。自分が亡くなってもあっけらかんとしている娘を見て、父は安心した顔を見せた。最後に覚えている光景は、駅のホームだった。父は最後に汽車に乗り込み、一緒に行こうとする娘に「雅子はここまでね」と制し、去って行った。そこで父を見ることはなくなった。「父が亡くなって不利益はあったけれど、それはすべて大人になるためのサ



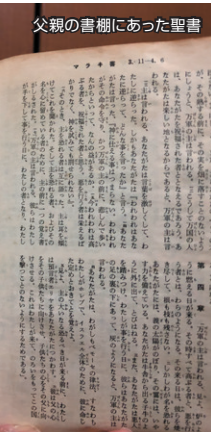
文化庁認定日本遺産の琵琶湖疏水。雅子さんの父親は休みごとに史跡巡りに連れていってくれた



滋賀県大津市の百穴古墳群家の近所にあり、父親と訪れた



現役教師時代の岡田治之兄弟(2006年頃)



専任宣教師時代の岡田長老(右端)。1970年頃日本中央伝道部の大阪(万博パビリオン)、岐阜、高松、豊橋で奉仕

ンドペーパー※1でした。」真実を知っているので、父がいなくても悲観することもなかった。その後も家族は何度か引っ越しをし、母の故郷である金沢で高校1年までを過ごした。

### 先生は本物のクリスチャン

家族は、雅子さんが高校2年に上がる前に千葉県に引っ越した。1学年10クラスを擁する公立高校での学校生活は楽しかった。ある日の昼休み、「職員室に行ったら、先生がお弁当の上に片手をのせてお祈りしてたよ。クリスチャンだから」と友達が教えてくれた。岡田治之先生は当時38歳。生徒たちの間で「ティーチャー」と呼ばれ、慕われていた。「穏やかで、いつも微笑んでいらっしやる。これまでそんな先生に出会ったことがありませんでした。職員室に向かっているときも、頭を上げて、本当に楽しそうに明るい感じで歩かれるんですね。」当時、先生と生徒の間には厳格な距離があり、生徒と対等な感じで接する先生などいなかった。世界史に出てくるキリスト教にあまり良い印象がなかったが、先生との出会いで温かく明るい雰囲気を感じるようになった。

岡田先生は2年間担任をし、英語を教えてくれた。雅子さんは英語が大の苦手だったので、机に突っ伏して寝てばかり。良い生徒ではなかった。先生はそんな自分を心配してくれるが、怒ることはなかったという。一方で、国語が大好きで、将来は高校の国語の先生になりたいと思った。しかし、大学受験をするが結果は不合格。就職先も決まらないまま卒業式を迎えることになる。

卒業式は好天に恵まれた。「もう、これで学校に来なくていいよね。」教室は普段通りの明るい雰囲気、皆は席の横や後ろを向いて、友達と談笑していた。やがて先生が教室に入ってきて、教卓の前に立った。なんとなくがやがやと前を向いた生徒たちは、最後のホームルームが始まるのを待っていたが、先生はうつむいたまま。どうしたんだろうと心配していると、先生は絞り出すように、「慣れているはずなのに、どうしてこんなに別れが辛いんだろう」——言葉に詰まりながら涙ぐんだのだった。ハンカチを取り出して目頭を押さえたり、手で涙を拭う友人たち。皆がもらい泣きをしていた。「先生が、しかも男の先生が泣くなんて……。すごい衝撃で

した。生徒は誰一人泣いていないのに、わたしたちとの別れを悲しんで泣いてくださっている。あの瞬間に、皆の先生への思いはマックスになりました。愛されていると思いました。」満たされた思いで母校を巣立った。

### わたしはなぜ捜されているのだろう

卒業後まもなく、家族は県外に引っ越すことになる。仲の良かった友人とは連絡を取り合っていたが、その頃は携帯電話もなければ、遠距離通話も高額だったため、連絡を取り合うのはもっぱら文通だった。卒業から2か月ほど過ぎた頃、千葉県にいる友人から「先生が仲の良かった子たちに電話して、あなたがいなくなったと捜しまわっているよ」と、すごい勢いで電話がかかってきた。

「あしなが育英会への奨学金返済の手続きは、ちゃんと済ませてきたし、支払いもう始まっている。何も捜されるようなことはしていないはずだ。わたしは何をやったんだろう。わたしはなぜ捜されているのだろう。」雅子さんは驚き、少し動揺した。

すぐ電話をかけると、先生はこれまでと変わらない、優しく穏やかな声で、「今どうしているの?」と近況を尋ねた。もう新しいクラスの担任をしているにも関わらず、先生は進路が定まらず卒業して行った教え子を、ずっと気にかけてくれていたのだった。胸が熱くなった。これまで10回以上引っ越しをして、転校も多かったが、これほど人として純粋に自分を心配し、大事に思ってくれる先生は初めてだった。こんな風に捜されたこともなければ、愛されたこともない。本物のクリスチャンだと感じた。十代の敏感な心には、上辺だけではない心からの関心

※1一紙やすり。自分を磨くための訓練の意



富山県の雨晴海岸にて、岡田兄弟(左)と鈴木ご夫妻



金沢城公園を訪れた岡田ご夫妻



JR金沢駅にて

によって、自分が価値のある存在だと思えたのだった。

その後数年間、年賀状のやり取りがあったが、筆不精もあり連絡は途絶えてしまう。しかし、先生のことは時々思い出し、また会えますようにと祈っていた。

### カトリック教会との出会い

雅子さんは29歳で結婚し、幸せな生活を送っていた。その中でもずっと、父が連れて行ってくれた教会に行ってみたくないという気持ちがあった。子育てに手がかかる時期が過ぎたころ、雅子さんは行動を開始する。父と行った教会のたたずまいは覚えているが、転居が続いたので、場所の記憶は定かではない。途方に暮れたが、唯一の手がかりであるマリア像とロザリオがある教会を捜してみたところ、ようやくカトリック教会だと分かった。

ふらっと立ち寄った金沢の教会堂で、雅子さんはずっと疑問に思っていたことを聞いてみた。聖書物語では偶像礼拝はいけないと書かれていたのに、なぜマリア像があるのか。大量虐殺をした人は地獄に落ちるといいますが、それは本当なのか。キリストが生まれた月はどこにも書かれていないのに、なぜ12月にクリスマスをするのか……。一つ一つの説明を受けて、納得できた。少しの疑問は残るが、拒否感や違和感はない。何よりも父の影響なのか、キリスト教にとっても興味があった。2011年、雅子さんはカトリックの洗礼を受け、熱心な信者となり、奉仕にも励む生活が続いていた。

### 先生の教会について、いろいろなことを知りたいです

2019年10月、いつもはテレビを見ないのに、その日はたまたまテレビがつい

ていた。大きな土砂崩れの様子が映し出されており、気になってテロップを見ると、そこは先生が住んでいた町だった。千葉市は9月に台風15号、10月には台風19号と大雨が相次ぎ、甚大な被害を受けていたのだった。心配になり、すぐに同級生だった友人に電話をするが、先生は7、8年前に引越しており、誰も連絡先を知らないという。高校を卒業して34年が経っていた。もう退職しているはずの先生の無事を祈りつつ、その年の暮れ、卒業アルバムに載っていた住所宛てに年賀状を出したのだった。

2020年元旦、岡田兄弟は昔の教え子からの年賀状を手にし、宛名を見て驚く。どうやってこの住所で届いたのか。神様の御手を感じた岡田兄弟は、「わたしはきっと、この子に福音を教えるようになる」、そう妻の綾子姉妹に語った。それから2か月ほどは、手紙のやり取りの中で福音の話に触れられずにいたが、「自分たちからはレッスンを絶対勧めないようになる言葉を使うから、モルモン書もそのときに送る。」信じて時を待った。

それからまもなく、「先生の教会について、色々なことを知りたいです」と書かれた手紙が届く。「人が亡くなると神のみもとで永遠の安らぎを得ると教わったけれど、それならば、なぜ主の再臨があるのか、裁きはいつ行われるのかなど、どうしても自分の中で整合性が取れなくて……。」黙示録を読んでも分からないという彼女に、岡田兄弟は救いの計画の概要を伝えた。「矛盾がない!」雅子さんは一瞬で理解する。ミサで決まった祈りをするということについて、これが本当の祈りなのかという疑問もあった。「お祈りの定型文は、いつか誰かがしたお祈りで

あって、今のあなたの気持ちは違うよね。その人のそのときの気持ちでお祈りするんだから」の答えも腑に落ちた。恩師からの説明を聞いて、「あー、やっと分かった」と飢えが満たされていく感覚——今まで分からなかったこと、求めていたことが解決するかもしれない。さらに確かな福音の真実を求めて、雅子さんは教えを受けることを決意したのだった。

### モルモン書への抵抗

2020年3月、COVID-19によるパンデミックのため、外国人宣教師は自国に帰り、残った宣教師でオンライン伝道を模索していたときだった。雅子さんは、岡田兄弟からゆうバックで送られてきたモルモン書や福音の原則など数冊の本を前にして、困惑していた。「本当は読みたくなかったのですが、ほかならぬ先生から送られてきた本なので、しぶしぶ読むことにしました。」特にモルモン書については強い偏見があり、聖書を切り貼りした本のように感じられ、かなり斜に構えたという。

カトリック教会では役割も果たす敬虔な信者で、モルモン書に強い偏見を持ちながらも、それでも真理を探し求め、福音を自分から直接聴きたいという教え子——岡田兄弟は、本当に自分たちが福音を教えていいものかと思案した結果、以前から世話になっている井上龍一兄弟<sup>※2</sup>に相談することにした。「全然構わないですよ。会員はすべて宣教師だと教わっているでしょう。ですから福音を教えてあげたらどうですか。」即答だった。岡田兄弟も、彼女の福音のスタートを、自分たちに託されてもいいんじゃないかと感じた。

週1回、約3時間の携帯電話によるレッスンが、岡田兄弟と妻の綾子姉妹に

Love Share Invite ——  
愛し、分かち合い、招く

2020年10月、金沢ワードでの雅子姉妹のバプテスマ会には岡田ご夫妻も駆けつけた



雅子姉妹は現在、金沢ステーキのコミュニケーションディレクターを務めている。2022年11月、教会の広大な駐車場で行われた献血奉仕活動にて

よって始まった。岡田兄弟は、日本に伝道部がまだ二つしかない時代に専任宣教師として伝道をした経験を持つ。綾子姉妹も、もっと伝道に心を注ごうと決意していた時期だった。夫妻は携帯電話のスピーカーフォンを使って二人で一緒にレッスンをを行い、約半分ずつの時間を担当した。レッスンと言っても福音の話ばかりではない。歴史や政治など雅子さんの関心は広く、しばしば話は膨らんでいく。「レッスンは難しい言葉ではなくて、楽しい話をしているという感覚、分け合っているという感じでやっていました。」夫妻は雅子さんを自分の娘のように、「雅子」「雅子ちゃん」と呼ぶ。「教えることは苦痛じゃなくて喜びでした。考えながらよく聴いてくれて、受け入れていく。これだけ吸収してくれる子に教えることができるのは、幸せなことでした。」雅子さんも話をするのがうれしくて、その時間では足りないほどだった。

ただ、モルモン書への偏見は根強かった。理由は10年以上も前にさかのぼる。初めてカトリックの教会堂に入ったとき、雅子さんはたまたま廊下で出会った人に奥へと案内された。その人は「異端が3つあります」と言い、教会の名前を並べた。その一つが末日聖徒イエス・キリスト教会だった。雅子さんは自分でも事実を確認しようと、異端と名指しされた別の教会の人にも尋ねる。「モルモンはいい人だけど、自分たちで作った聖典を使っているのだから、異端です。気をつけてください。」その言葉と嫌悪感が心に焼き付いた。「岩のように硬い気持ちでした。レッスンは始まってからも偏見は続き、その気持ちはなかなか拭えませんでした。誰が何と言おうと、受け入れる可能性はまったくなかったと断言できま

す。」先生とのレッスンは楽しいが、モルモン書には強い抵抗感があり、なかなか読み進めない。葛藤を抱えながらもレッスンは続いた。岡田兄弟は「あれだけ聞く耳があるから大丈夫」とゆったりと構え、彼女を信じ続けた。

すべて良い木は良い実を結ぶ——  
突然、岩が崩れました

モルモン書への偏見に苦しみながらも、聖書の言葉が雅子さんの心にずっとささやきかけた。「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。……すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」※3

「たくさんある教会が木だと考えました。わたしは先生という良い実を知っている。そんな人は他にいるだろうか。この実を实らせた教会は、きっと間違いないだろうと思いました。聖書の言葉を口にする事なく、キリストの光を感じさせてくれる先生のいる教会は、もしかしたら本物かもしれない。モルモン書は信じられないけど、先生がそうおっしゃるならそうかもしれない。わたしが出会った中で、こんなにクリスチャンらしい人は他にいないのだから。」恩師を固く信じて、心にまかれた種を捨てようとする底知れぬ力と必死で戦った。

それでも、岩のようにかたくなな心は頑として揺らがなかった。カトリックに入るときもそれなりの決心をしたのだ。同じイエス・キリストを信じるのだから、あえて教会を移るほどでもないとも考えた。否定、嫌悪から入ったレッスン。岩が崩れるはずがない。そう思っていた。

しかし——「ある日突然、穴がシューッと空いて、光が見えて、受け入れられるようになりました。」偏見や拒否が打ち砕か

れ、教会のこともモルモン書のことも受け入れられ、バプテスマを受けたいと思うようになった。「一滴一滴の水滴のように、先生の言葉が心に落ちて行って、その岩にとうとう穴が空いた感じです」と譬える。

「多分、乱暴なやり方では岩は溶けなかったと思います。それだと、後でひずみが来ますよね。先生の温かさ、優しさ、寛容さ、キリストの光、すごい忍耐がなければ、岩は溶けなかったと思います。」

自分が清くなったことが  
分かりました

雅子さんは、引き受けていた役割を途中で放棄するのは無責任だと思い、12月末までカトリックに通おうと思った。しかし、岡田兄弟から「未練は断ち切って、即移った方がいい」と勧められ、それに従う。あいさつに行くと、「残念だけど、あなたが決めたことだから。今までありがとうね」と寛容な言葉をかけられた。神父はどこかの教会に行くのかと尋ねた後、「あなたがどこかの教会に行かれても、神の道をまっすぐ歩めるようお祈りしていますね」と送り出してくれた。岡田兄弟は言う。「彼女には、責任感も力も人との繋がりもありました。でもイエスを信じたら、網を置いて、主について行くことですよ。彼女は本当に網を置いたんです。」

2020年10月18日、雅子姉妹は金沢ワードの教会堂でバプテスマを受けた。バプテスマ会には夫の鈴木重信すずき しげのぶさんも出席した。宣教師と会ったのはバプテスマ前の面接のときだけという、異例の改宗だった。「自分が清くなったことが分かりました。それは以前に受けた洗礼とはまったく違うものでした」と雅子姉妹は証言する。

Love Share Invite —  
愛し、分かち合い、招く



鈴木雅子姉妹と岡田ご夫妻。東京神殿参入の日に

信じていることを自然に表したい

岡田兄弟はいまだに不思議に思うことがある。「自分は未熟な人間。何が彼女に訴えたのか分からない。ただ真面目に一生懸命教えていただけなんですよね。彼女と1対1での会話は2, 3回、それもほんの一言二言ですから、びっくりしています。わたしのことを覚えていることすら驚きです。」教師として、取り立ててこうしたいということにはなかった。「ただ伝道中に自分が教えてきたことに対して、自分も忠実に従っていきたくて思っていました。」

今度は自分が実践する番、試される番だと思って、必死だったんですね。自分が学んできたこと、信じていることを、毎日の生活の中で自然に表して行きたいな、と思っただけだったと思います。」

意図せず、声高にでもなく、「ごく普通に自然な方法で」\*4 伝えられた福音の光。それは雅子姉妹を温かく包み込み、闇を払い、岩をも貫き通すほどの力も有していた。7か月間に及ぶレッスンの後も、勉強

会はごく普通の会話の中で、今も楽しく続けられているという。

\*\*\*

2022年10月、雅子姉妹は東京神殿に参入し、自身のエンダウメントを受けた。それまでパンと水にあずかれば十分だと思っていたが、イエス・キリストをより身近に感じる体験となった。幼いときに思い出し、人生を導いてくれた父との契約——それを永遠のものにするために、よく準備をして近いうちにまた参入したいと思っている。◆

# 今月のNews Headlines

●ニューズルームはこちら!

<https://news-jp.churchofjesuschrist.org>



- 神殿・家族歴史と教会を沖縄の人々に知らせる——教会提供のラジオ番組「あなたとニー(根)コネクト」10月24日リリース
- 2023年の地域カレンダーは教会員がキリストのことを喜ぶ助けとなる 11月13日リリース
- 東京神殿別館が令和4年度 港区街づくり奨励賞を受賞——地域社会に溶け込む日本東京神殿 11月22日リリース

※上記リストは日本発信または日本に関連する記事のみです。海外発信記事(日本語)も数多く配信しています。

## 皆様の情報をお寄せください

会員の皆様の身近な話題をご紹介します  
◎『リアホナ』日本語版編集室  
〒106-0047 東京都港区南麻布5-8-8

TEL. 03-4545-3100 (代)  
電子メール:  
[JPNLiahona@churchofjesuschrist.org](mailto:JPNLiahona@churchofjesuschrist.org)

◎国際機関誌「リアホナ」のお届け、  
その他商品に関するお問い合わせ——  
教会配送センター  
TEL. 03-5668-3391  
FAX. 03-5668-3392

## 役員の変動

2022年10月17日から11月21日までに  
教会組織指導者住所録で更新された役員の変動(敬称略)

- |                                |   |                               |
|--------------------------------|---|-------------------------------|
| ● 青森地方部八戸支部<br>会長: 山崎 弘貴       | ● 松戸ステーキつくばワード<br>ビショップ: Cade C. Bushnell | ● 日本高松地方部<br>第二顧問: 森村 重義      |
| ● 仙台ステーキ上杉ワード<br>ビショップ: 石崎 孝二  | ● 名古屋ステーキ犬山ワード<br>ビショップ: 木村 真崇            | ● 日本長崎地方部<br>会長: 桑原 淳生        |
| ● 仙台ステーキ福島ワード<br>ビショップ: 服部 正仁  | ● 名古屋ステーキ福德ワード<br>ビショップ: 日坂 勉             | ● 第一顧問: 辻郷 美太郎<br>第二顧問: 一丸 俊雄 |
| ● 金沢ステーキ小松ワード<br>ビショップ: 金井田 拓真 | ● 京都ステーキ岡町ワード<br>ビショップ: 増本 祐司             | ● 鹿児島地方部川内支部<br>会長: 佐々木 康朗    |

## 専任宣教師

●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット、MTC入所日/着任日



与座 朝矢  
名古屋伝道部  
沖縄ステーキ  
沖縄ワード  
2022年5月1日  
オンライン訓練開始

\*宣教師の方は着任の前後に写真と情報を  
所定のウェブフォームからお送りください。